青海の白い雲

高野敦志

はじめに
ふたたび中国へ
西寧での歓待
高原に広がる青い海
ツォンカパを祀るタール寺
タンカの里レコン
はるか彼方の極楽浄土
蘭州にも白頭山？
チベット人との語らい
あとがき

目次

はじめに
ふたたび中国へ
西寧での歓待
高原に広がる青い海
ツォンカパを祀るタール寺
タンカの里レコン
はるか彼方の極楽浄土
蘭州にも白頭山？
チベット人との語らい
あとがき

はじめに

チベット旅行記『懐かしのチベット』の続篇です。二〇〇〇年（平成十二）の夏に、チベット人が居住する青海省から甘かん粛しゅく省にかけて旅した記録です。今回は日本人は僕一人で、中国人のガイドと運転手の三人で行動しました。『青海の白い雲』と名づけることとし、エッセイ「チベット人との語らい」を加えました。

ふたたび中国へ

前年に、チベット自治区のツェタンやラサを巡った僕は、青海省、チベット人がアムドと呼ぶ地方を旅することにした。青海省と言うと、中国本土のように聞こえるが、中国人（漢族）が古くから居住していたのは、西せい寧ねいなど一部の地方に過ぎず、一九二八年に青海省が成立した後も、大部分はチベット人やモンゴル人、イスラム教徒など、少数民族が共存していた。中国化が押し進められたのは、中華人民共和国が成立して以降である。

二〇〇〇年八月六日の午後四時半過ぎ、成田発の北京ペキン行き航空機に乗り込んだ。今回の旅を通じて、僕の人生観が変わるようなことがあるだろうか。まだ若かった頃の自分は、そんなことをよく考えたものだ。前年に訪れた時は、初めての海外旅行だったこともあって、最初はおどおどしていたのを覚えている。中国は二度目であるし、中国語も少しは勉強したから、以前のような緊張はなくなっていた。

ところが、貨物の積み込みに手間取り、出発は一時間以上遅れた。夕陽を眺めながら離陸して、日本海に入る頃には日が沈んでいった。中国時間午後七時半、大連空港に着陸。いったん機体から下りて、入国審査を受けた。乗り継ぎ券を受け取って。

すでに入国しているので、北京空港ではすぐに外に出られた。出迎えてくれたガイドは、師範大学を出たという男性。途中、天安門広場の横を通る。ライトアップされているが、ぼんやり外観がうかがえる程度、人影はまばらである。明日、もう一度寄ってくれるそうだ。青海省の旅はどうやら、お客が僕一人らしい。

北京の天橋賓館ひんかんというホテルに泊まった。Rainbow Hotelと訳されている。「天橋」とは黄土で作られた皇帝のための道で、それが天まで続いていると考えられたことが、ここの地名の由来だという。今回の旅行では北京は通過点なので、ホテルの周辺を歩いたぐらいである。

昨夜のガイドが来て、朝の天安門広場に寄ってくれた。ちょっと歩いてみる。現在のように、大気汚染は深刻ではなかった。しかも、真夏だったから、朝の空気はすがすがしかった。子供の頃、百科事典で見たとおり。赤瓦の二層の屋根に赤い壁、中央には毛沢東主席の写真、左右に「中華人民共和国万歳　世界人民団結万歳」の文字が掲げられている。昨夜のガラガラと打って変わり、多くの人たちが行き来している。ここで起こった悲劇については、触れない方が身のためである。

その足で北京空港に向かった。西寧行きの飛行機は午前十一時半発だった。すぐに機内食が出たが、炒チャー飯ハンとパン、カステラ、搾菜ザーサイ　、チョコレートという奇妙な組み合わせだった。

窓からは見たことがある風景が眺められた。丸裸の砂漠のような山々、その間に刻まれたわずかの谷間に緑が伸び、集落が点在している。チベットの山々に似ているが、万年雪はいただいていない。

懐かしのチベットは、あの山の先にある。そうした裸の山に造られたのが、西寧曹そう家か堡ほ空港である。立地条件としては、ラサのクンガ空港に似ている。ただ規模は小さくて、タラップを下りると、到着ロビーまでは歩いていく。少し涼しいが光線はかなり強く、しばらくすると暑くなってきた。

西寧での歓待

ガイドに現れたのは、白さんという青年だった。まだ日本語が流りゅう暢ちょうではないが、素朴な感じで一生懸命なところに好感が持てた。都内の日本語学校で数ヶ月学んだことがあるとのこと。運転手は陳さんという青年で、僕は片言の中国語で挨あい拶さつした。とりあえず、ホテルに移動した。

まだ午後三時前だった。白さんとは五時半に、夕食に行く約束をしていた。それまでは暇だった。部屋の中はまだ清掃前のようで、後から片づけに来るということだった。そのとき、中国語で変な電話がかかってきた。さっぱり分からないし、英語も通じないので、掃除のことだと思い、「請来チンライ（来てください）」と言ってしまった。

すると、ノックして可愛い小姐シャオジェ（おねえさん）が入ってきた。ベッドの上に座り、肩を叩たたいてにじり寄ってくる。白い体の線が透けたチャイナドレスを着ている。もう分かってしまった。何てことだ！

「你ニー是シー哪ナー国グォ人レン啊ア（あなたはどこの国の人なの）？」と訊きくので「我ウォー是シー日リー本ベン人レン」と答えた。

何だか口ではうまく通じない。そこで、筆談をしたくなった。「請チン写シィエ漢ハン字ツー」と言うと、「你ニー需シュー要ヤオ別ピィエ的ダ服フー務ウー嗎マ（あなた、別のサービスが必要なんでしょ）？」と書いて渡してきた。随分思わせぶりである。「不プー要ヤオ」とか「不プ明ミン白パイ（分からない）」とか言っていると、本物の掃除の小姐が来た。ようやく怪しい女は退散した。

ホテルを出て、北禅寺に行ってみることにした。寺と言っても、道教の寺、道観である。横浜の関かん帝てい廟びょうは行ったことがあったが、道士のいる本場の道観は初めてである。創建から二千

年の歴史があるらしい。場所は長江路の先、北山駅の向かいにある山の中腹である。
　坂道を上っていくと、駅前に商店街が現れ、屋台ではフットボールのような西すい瓜かや、生の肉を常温で広げて売っている。天主堂というのは、キリスト教の教会である。外国人が足を踏み入れない所には、現実の中国人の生活が息づいている。日本語さえ話さなければ、すれ違った相手も、こちらが日本人だとは気がつかない。地図を頼りに何とかたどり着いた。
　北禅寺は岩山の中腹にしがみつくように建てられ、それぞれの建物は清きよ水みずの舞台のようにせり出している。外観から言えば、山寺で知られる立りっ石しゃく寺じの五大堂に近い。さながら空中楼ろう閣かくである。恐ろしいほど急な数百段の階段を上り、砂じゃ利り道みちを少し進んだところで、入場料を二元払った。

　北山に建こん立りゅうされたことから、北山寺とも呼ばれる北禅寺は、初め仏教寺院として建てられた、青海省では最古の宗教建築である。清朝の時代に兵火に焼かれ、道観に改められたという歴史を持つ。
　したがって、岸壁には石仏が風化した姿で残される一方、道教の地ち母ぼ神しんが祀まつられている。日本では神しん仏ぶつ混こん淆こうが一般的だったように、中国では道教と仏教が互いに影響し合ってきた。例えば、心理学者のユングが紹介した道教の経きょう典てん『太たい乙いつ金きん華か宗しゅう旨し』（黄金の華の秘密）には、気功によって分身を作る方法が書かれているが、天台宗の三さん観がん（空観・仮け観かん・中ちゅう観がん）の教義や『楞厳経りょうごんきょう』が引用されているのである。
　本ほん殿でんに入ると、黒い着物をまとった神様が並んでいる。外国人には仏教と道教の区別をすることは難しい。神前でも線香が焚たかれているし、建物の造りは同じだからである。本物の道士の姿は見られなかったけれども。参拝した後、振り返った下界の眺めは絶景である。手に取るように西寧の街が見渡せるのだが、どこか埃ほこりっぽく黄色くかすんでいる。いかにも中国内陸の都市と

いった面おも持もちをしている。

三十分ほど歩いて、西寧のホテルに戻った。ガイドの白さんが戻ってきた。レストランに行ったのだが、僕一人じゃ食べきれないから、ぜひ一緒に食べてほしいと、白さんと運転手の陳さんも誘った。メニューは数種類あったが、四川料理の魚ユイ香シャン肉ロー絲スが一番おいしかった。辛口の青チン椒ジャオ肉ロー絲ス　といった感じで、海のない四川で魚料理に似せて、豚肉や人参、筍たけのこなどを甘辛く炒いためたものである。

陳さんとは筆談で話したのだが、密教や僧侶の法ほう力りきに興味があるらしい。僕は加か持じ祈き禱とうの本にどんなことが書かれているか話した。日本の密教は中国から伝来したのだが、中国の密教は道教に押されて衰退してしまった。一方、チベット仏教はチベット人やモンゴル人、満州人の宗教であって、本土の中国人には信仰されていない。そこから「気」の話になり、日本語には「気が合う」とか「気がない」など、「気」がつく言葉が非常に多いことや、中国語には日本語では古語になっている言葉があることなどを話した。例えば、「行こう李り」は中国語では「荷物」の意味である。

中国人と親しくなるこつは、細かいところにこだわらず、友達のように心を開くことである。日本語教師であることを話していたから、「先生は本当に、中国人の心が分かる」と白さんは言った。彼は魯ろ迅じんのことが好きで、「藤野先生」を小学校の教科書で読んで感動したそうだ。

その夜、白さんに勧められて、お宅にお邪魔することになった。中国人の家庭を訪問するのは初めてだった。集合住宅の階段は明かりがなく、懐中電灯をつけなければ足元も見えない。ところが、玄関を開けると、部屋がきれいに飾られているのに驚いた。四十インチのテレビや、滝の流れを映す電光の壁飾りに目を見張った。ご両親やお祖母ばあさんが在宅していた。白さんのお父さんは日本で働いた経験もあり、日本語がとても流暢だった。フレンドリーな感じ

で迎えられたので、初対面の僕は感激してしまった。お茶とコーヒー、フットボール型の西瓜も出してくださった。僕は下手な中国語に筆談も交えて、お母さんやお祖母さんに話しかけた。
「テレビで見る固い日本人とは違うね」とお父さんに言われた。
　それもそのはずで、僕は社会人になって以来、もっぱら中国人に日本語を教えてきたので、小さなことにこだわらない、おおらかな性格が好きになっていたし、何でも本ほん音ねで話すことで、中国人学生の信頼を得てきたからだった。
　予定では、あさって西寧に戻ってくることになっていた。
「餃子ギョーザをごちそうしましょう」と言うお言葉に甘えて、もう一度うかがうことにした。

　タクシーで西寧のホテルに戻った。午後十一時を回っていた。僕は昼間に起こった出来事、怪しげな女性が部屋に来てしまったことが不安になった。ここは言葉のよく分からない国、しかも自分一人きりなのだから。時計を見ると、間もなく深夜である。
　入浴してベッドに入り、うとうとしたところだった。けたたましいベルの音。寝ぼけて手を伸ばすと、何やら女が中国語でしゃべっている。案の定だった。目をこすって見た。まだ午前二時である。いい加減にしろと思って、すぐ切ったのだが、眠った途端にまたベルの音。部屋まで行ったんだから、お金払ってちょうだいとでも言ってるんだろう。午前三時までに五回ほどかかってきた。これでは眠れない。
　そのとき、いいことを思いついた。受話器はベッドの脇と浴室にあったから、浴室の受話器を外しっぱなしにしておけば、もう電話はかかって来ないだろう。そう思ったのだが……。
「何だ、あの音は！」
　鍵をかけた部屋のドアをノックしてるじゃないか。無視していると、またノックする。しばらくしてからまたノック。僕は背筋に冷たいものを感じた。もしドアを開けてしまったら、いきなりヤクザが入ってきて、首を絞しめられてしまうかもしれない。
　すっかり逆上した僕は、「このホテルは売春宿か」とつぶやい

た。もう眠れなくなった。早く朝にならないか。しかも、西寧に戻ってきたら、またここに泊まらなければならないわけだし。

高原に広がる青い海

少し眠かったが、気持ちを切り換えることにした。ガイドの白さんから電話があり、運転手の陳さんと三人で朝食を取った。ホテルを出たのは八時過ぎ。道路は工事中で混雑している。

カーブが多い道を、渓けい流りゅうに沿って車を飛ばしていく。林はまばらになってきたが、チベット自治区と比べると、はるかに緑が多い。これは標高がまだ三千メートルに達していないからだ。風景は長野県のようで、白樺の並木が道の両側に広がっている。楊よう樹じゅというのは柳の一種で、しだれずに枝を天に向かって伸ばしている。

日にち月げつ山さんにたどり着いた。標高は三千五百メートル。富士山よりは少し低いから、酸素の薄さはさほど気にならない。西寧が二千三百メートルだから、少しずつ体を慣らしてきたことになる。唐の皇おう女じょ文成公主ぶんせいこうしゅが、古代チベット（吐蕃とばん）のソンツェン・ガンポ王に嫁とつぐため、この峠に差しかかったところで、「日月寶鏡ほうきょう」という鏡を取り出した。懐かしい母と長安の都が写ったので、うれしさと哀しさのあまり、落として割ってしまった。そこからこの地が日月山と呼ばれるようになり、流した涙は倒淌とうとう河となって今も青海湖に注いでいる。

日月山には日亭リーリャンと月亭ユイリャンという、中国式のお堂が建っている。周囲には五色のタルチョ、経きょう文もんが書かれた布が敷かれている。月亭に登る途中で、チベット人の衣装を着て、ヤク（毛牛）にまたがり、写真を撮ってもらった。

近くのみやげ屋では、冬とう虫ちゅう夏か草そうという虫に寄生した茸きのこや、雪蓮せつれんという薬草、鹿の男だん根こんなどが売られている。向かいの日亭の上には、字が読めなくなった古代の石碑と、再建された新しい石碑が並んでいる。そこには唐と吐蕃の国境であることが記されているという。

遠くに青海湖の水平線が見えてきた。青海湖はココノールとも呼

ばれる。青海湖というのは、このモンゴル語の漢訳であり、チベット語のツォ・ンゴンボも同じ意味である。青海省が設定されたのは、中華民国の時代であるが、その頃はもっぱらチベット人、モンゴル人が混在している地域だった。

運転手の陳さんが、蜂蜜を買いたいと言っているらしい。寄ってもいいかと白さんが言うので快かい諾だくした。路ろ肩かたに車はゆっくり止まった。掘っ立て小屋があって、養蜂場となっているらしい。周囲には菜の花畑が広がり、広大な湖面が広がっている。

小屋の中は電球がともるばかりで、真昼といっても薄暗かった。二人は蜂蜜のほかにロイヤルゼリーも買っていた。僕は何も言わずに、ただ眺めているだけだった。日本でも見たことがなかったからだ。

「先生も買いますか。二年は腐敗しないって言ってますよ」

けれども、チベット人のおばさんが、ドラム缶から枡ますですくっているので、衛生面が気になって買わなかった。ふたたび車に乗り込むと、青海湖の岸に沿って進んでいった。

左側には緑の山並みが広がり、右側には草原が湖岸まで続いていた。緑の中にところどころ紫の花も咲いている。湖があって雨も多少降るので、チベット自治区のような剝むき出しの岩山にならずに済んでいるのだ。

青海湖の水面は緑がかったライトブルーで、いかにも冷たいという印象だ。富士山の頂上のような標高にあり、まるでオホーツク海沿岸の原げん生せい花か園えんの脇を、ドライブしている感じである。

湖水は光線の加減で、浅いところはエメラルドグリーンに、深いところはダークブルーに変わる。大陸の中に閉じ込められた海という感じで、潮風のような磯の香りがする。塩水湖なのである。太古の昔にインドがユーラシア大陸に衝突し、ヒマラヤが生まれたわけだが、その際に浅い海がせり上がって、湖として取り残されたらしい。

車を止めてレストランで昼食をとった。料理は青海湖で獲れた魚

である。スープ、揚げ物、煮物などがメインで、湟ホァン魚ユィという固有種を使う。裸ロー鯉リーとも呼ばれるのは、うろこがないからである。さっぱりしているがくせもある。三人でも食べきれなかったのは、量が多かったせいもあるが、鍋でお湯を沸かして、魚と塩を入れて沸騰したらハイ出来上がりみたいな味で、あまりおいしくなかったからだ。

目指す鳥島は遠かった。二時間ほどは猛スピードで、湖岸に沿って走ったと思う。鳥島旅游集票庁で切符を買い、岬に向かって小道を進んでいく。遊覧船が見えるところで車を止めて、高台まで登っていった。そこからの眺めは素晴らしく、湖に浮かぶ鳥島も見える。

緑の水面に包まれるように、赤っぽく浮かび上がって見えるのが鳥島だ。七月ぐらいまでは、海鳥のカモメや雁、鴨が集まるのだが、立秋過ぎの今頃はまばらにしか見えない。その場には白さんと陳さん、僕の三人しかいなかった。周囲には人影がほとんどない。遊覧船はお客が集まらなければ出ないらしい。

車に乗り込んで蛋島ダンタオに向かうことになった。白さんの説明によれば、その小島はかつて沖にあったが、今は陸続きになってしまっている。というのも、青海湖の水面が毎年十センチずつ下がり続けているからだ。地球温暖化の影響かどうか分からない。とにかく、降る雨や注ぎ込む川の流れよりも、蒸発する方が速いのである。

この広大な湖も、中央アジアのアラル海のように、やがて消えていく運命にあるのかもしれない。今は草原となっているあたりから彼方の山々まで、満々と水をたたえていたことだろう。かつての湖底は緑の大地となり、遊牧民はヤク（毛牛）や羊を放牧し、家を建てて居住するようになった。

蛋島の手前で車を降りた。一直線に伸びる道の両側は柵が設けられ、乗り越えていくことは許されない。小さな門があって、少し盛り上がった所が蛋島である。

そこは撮影禁止となっており、監視員が一人立っている。そこ

で、望遠鏡で鳥を観察することにした。鷺さぎがいるのだろうか、白く大きい卵が見える。湖岸の砂浜では、カモメが数羽飛び交っている。

海鳥は日本でよく見かけるけれど、それが大陸の奥深く、富士山の頂上ほどの標高で見られるのは珍しい。やはり、青海湖はかつて大洋の一部で、ヒマラヤの造山運動とともに取り残されたのだろう。風が吹いてくると、ほんのり磯の香りがする。

あとは帰るだけだ。ひたすら猛スピードで、元来た道を戻っていく。とにかく、ゆっくりしてる暇はなかった。三時間ほど突っ走ったところで、「西海漁村」という店に入った。夕食はもっぱら肉料理だった。排骨バイコーの甘酢かけや、虎フー皮ピーという獅し子し唐とう風の野菜を、胡麻をつけてピリ辛でカリカリに焼いた「虎フー皮ピー青チン菜ツァイ」が、とりわけおいしかった。

店を出て少し行ったところに、今夜の宿泊所があった。チェックインした後、三人で周囲を散策した。向かいの草原には、天あま翔かける馬の像があった。すでに日は沈みかけ、東の空からは夜が忍び寄ってきていた。頭上の空も赤紫色に変わってきた。これは騎馬民族のシンボルであり、彼方の山々をバックにした姿は、モンゴル帝国への憧しょう憬けいを感じさせるものだった。

白さんの話では、東を目指すというのは、新たな始まりを意味しているということだった。これは東征を意味するのではないか。元の時代のように、中国全土を支配したいという夢を表しているのかもしれない。

闇が迫りつつあった。湖岸に向かっていくと、チベット人の若者が小舟を出そうとしていた。慣れていないのか、二に艘そうのうち一艘は、たぷんたぷんと横揺れしている。岸辺の明かりが、波に翻弄される顔を浮かび上がらせる。ブルーン・ブルーン・ダダダダダ……。モーターをかけると、二艘は暗い湖上に消えていった。

砂浜にはチベット人のテントが並び、内側から照らされた模様が、大きな提灯の群れのように見えた。白地に黒い糸でほどこされた刺し繍しゅうが、エキゾチックな柄のように感じられる。僕はア

イヌ人の民族衣装、アットゥシを連想した。
テントは二十近くはあるのだろうか。中ではバター茶や「ツァンパ」と呼ばれる麦焦がしをもてなす商売が行われている。白さんの話によると、ここでも拝金主義が横行しているので、日本人と気づかれない方がいいとのこと。「はい」「です」という音が聞こえると、たちまち日本人だと気づかれてしまう。
チベット人が近づいてくると、白さんは僕を、広州からきた漢族だと言って、煙けむに巻いていた。弥やよ生い人じんは中国南部から渡来したというから、そう見えるというのも納得がいく。まあ、吹っかけられるのはいやだが、ちょっと寂しい気もした。
風が吹いてくると、初冬を思わせる寒さとなった。宿泊所に戻ることにした。疲れていて眠かったので、風呂に入るのはやめた。浴槽の中は便器のように黄ばんでいたし、天井板は外れたままだったし。実は、お湯を入れてみたのだが、しばらくすると漏れてなくなっていた。
部屋の中を蠅はえが飛んでいる。それはしかたがないとして、蠅叩きで殺した蠅が十匹ぐらい、窓の桟の上に放置されていた。僕は志賀直哉ではないから、「それを見てゐて、如い何かにも静かな感じを与へた。淋しかつた」とは感じない。死んでいたのは蜂じゃないし。にぎやか過ぎて無気味だ。
そればかりではない。茶碗の受け皿にティーパックが置いてあったのだが、茶碗をふかずに置いたせいで湿っている。僕は中国のホテルでは驚かなくなっていた。高級な所でも、二つに割ったゆで卵が、殻からをつけたまま大皿に盛られていたりする。それに、西寧でのハプニングもあったから。

朝日が射さしている。まだ七時半だが、食事まで時間がある。白さんと一緒に、天翔る馬の像がある草原を散歩することにした。周辺には多くの羊が放牧されて、無心に草を食はんでいる。男の子が羊の周りを走り回っている。チベット人の男が馬に乗ってきて、乗馬しようと誘ってきた。
中国人の朝食はあっさりしている。たいていお粥かゆである。京

都の人間もそうだが。それに豆とう腐ふ餻よう、これは沖縄料理でも出てくる。豆腐を麹こうじと焼酎で発酵させたもので、チーズのような味わいと、塩辛のような旨みがある。今日はそれに、ニンニクの甘酢漬け、蒸しパンがついた。
　すでに九時を過ぎていた。予定よりだいぶ遅れてしまった。やはり、朝の青海湖は見ておきたい。そこで、車で湖岸まで行ってもらうことにした。あたりには韓国人の若者がたむろしている。
「あれは日本人ですか」と白さんに尋ねられた。僕は顔を見ただけで、たいてい区別することができる。服装は同じように見えても。
「韓国語と日本語は同じように聞こえますね」
「いや、全然違うよ。文法は似ているけど」
　青海湖の水面は、やはり昼下がりの方が憂いを帯びていて美しい。明るい夏の海って感じは平凡だ。堤の上からは背後のなだらかな山々が、朝日を浴びて目に映えている。湖水を覗のぞき込むと、魚の姿は何も見えない。
「いませんか。前来たときはいたのに」と白さんが言ったので、
「昨ゾー.天ティエン我ウォー.們メン吃チー了ラ」（きのう、僕たちが食べちゃった）と答えたら、彼は大笑いしていた。

　次に向かったのは小北シャオベイ湖。そこには人っ子一人いなかった。芝生のように砂浜に草が生い茂り、水面近くまで続いている。実は、小北湖はかつて青海湖の一部だったのだが、水位の低下とともに切り離されたのだ。アラル海のように、湖底が剝き出しになる運命が待ち構えているのか。
　湖岸には巨大な藻が、干からびた雑ぞう巾きんみたいに打ち寄せられている。一つが五十センチ近くもある。一部は五メートル先の湖面まで漂い、さざ波にゆらゆら揺れている。
「鳥はいませんね」と白さんが言った。
「ほら」
　僕は一羽のカモメを指さした。白さんと陳さんは、落ちていたゴミをカモメに向かって投げる。餌だとすかさずとらえようとするのだが。

「頭がいいから分かるんだよ」と僕は答えた。
　芝生のような草原で、三人は中国と日本の体操を見せ合ったり、腕立て伏せの競争をしたりした。陳さんが逆立ちをすると、白さんも真似してやったが、ずっこけてちょっと腰を痛めてしまった。
　それからは腕相撲で、白さんには楽勝で勝てたが、陳さんは本当に強くて、腕の筋肉の盛り上がりがすごかった。全く三人とも高校生に戻ってしまったみたいだった。
　車に乗り込みひた走る。すぐに小北湖は視界から消え、ダークブルーの青海湖の湖面を、後ろ髪が引かれる思いで眺めた。もう二度と目にすることはないだろうから。車は西寧の方向を目指したが、予定を変更して湟中こうちゅうに向かう。

ツォンカパを祀るタール寺

ツォンカパと聞いて、知らないチベット人はいないだろう。ダライラマを頂点にいただくゲルク派（黄教）の開祖で、密教の修行に中観派の空の思想の履修を義務づけ、戒律の厳守を説いたとされる。ツォンカ（現在の湟中）に生まれたから、ツォンカの人というのでツォンカパと呼ばれるようになった。

さて、タール（塔爾）寺（チベット名ではクンブム寺）の門前町、湟中に着いた。ガイドブックには、大ぶりの刀を持った男たちが徘はい徊かいしていて物騒だと書いてあったので、内心はびくびくしていた。とにかくチベット人から見たら、日本人と中国人（漢族）は区別がつかない。特に日が暮れたら、いきなり殴られたりしかねない。

昼食の前に、湟中の町を歩いてみると、そんな物騒な感じはしなかった。タンカ（仏画）や宝石を使った工芸品の店や、寺院に納める金メッキの鹿や法輪を作る作業場のほか、日常用品を売る店や食堂が軒を連ね、けたたましいクラクションを鳴らした車が行き交い、白い帽子をかぶったイスラム教徒の青年が、自転車で通り過ぎる。

青海省、チベット人がアムドと呼んだ地域が、チベット自治区と異なるのは、チベット人とモンゴル人、回族と呼ばれるイスラム教徒が、漢族の中国人と混在して暮らしている点である。彼らの共通語は、青海省で話される中国語の方言である。

白さんらと入った店のドアには、清真食堂という文字が見えた。これはイスラム教徒の回族が経営している。この町はチベット人だけでなく、回族の人口も多く、清真寺と呼ばれるイスラム教のモスクもある。とはいっても、中東にある石造りの物とは違い、外見は中国風で仏教の寺院と区別がつきにくい。

昼食は山菜のニンニク炒め、ほうれんそうの炒め物、羊肉の煮付けなどだった。割り箸があるが、見るとひらがなで「おてもと」と

書いてある。日本に輸出するために中国で製造しているというわけだ。

午後二時過ぎに、ツォンカパを祀るタール寺に参拝した。境けい内だいに入ってすぐに、如来宝塔がある。白色の饅まん頭じゅうを二つ重ねた上に、相輪そうりんの軸が突き出た形の仏塔である。

ゲルク派の祖、ツォンカパは一三五七年に生まれた。父親が一緒に出てきた胎たい盤ばんを埋めたところ、菩ぼ提だい樹じゅがすぐに生えてきた。その木は葉や樹皮が仏陀の姿を写し、妙なる香りを出すと言われる。一三七九年にまず仏塔が作られたが、タール寺の伽が藍らんが建てられたのは、一五六〇年頃、中国が明ミンの時代である。

タール寺は四方を山に囲まれ、悟りを象徴する八はち葉ようの蓮れん華げの形をしている。白壁の石造りに木枠の窓をはめ込んだチベット風の建築に、中国風の宮殿式仏殿が守られるように建っている。白檀の木が生える長寿殿（花寺）の中には、ツォンカパの母が座って休んだと伝えられる石も残っている。

大だい経きょう堂どうには弥み勒ろく菩ぼ薩さつの金色こんじきの像が祀られている。その前には、一九八九年に共産党のチベット政策を批判した後、謎の死を遂げたパンチェンラマ十世の写真が飾ってある。また、パンチェンラマそっくりの金色の像が、ゲルク派の宗祖ツォンカパの金像こんぞうと並んでいるところを見ると、チベット人がいかに亡きパンチェンラマを慕っているかが分かる。

薄暗いのお堂の中は、灯とう明みょうに捧げられたバターの燃える、独特な乳臭さが漂っている。この建物を支えているのは、百六六本もの柱である。壁にはガラスの棚が備え付けられており、そこにはツォンカパの小さな像が千体も祀られている。これを見ただけでも、タール寺がツォンカパのための寺院であることが分かる。

その向かいにあるのが、大だい金きん瓦が殿でんである。金色の屋根に、瑠る璃り色の外壁が特徴である。お堂の建っている場所で、ツォンカパは生誕したと伝えられている。そこから菩提樹が生えて、一部は建物の外まで伸びているという。

酥油ソーユ花ファ館には、バターで作られた人物像や花が飾られている。宮殿や役人、庶民、象などの動物まで彩色された形で丹念に作られ、ガラスケースも冷やされているのだが、気温の上昇とともに、一割以上が溶けて壊れてしまっている。

まあ、温度管理が適切でないのか、観覧時間が過ぎたら、スイッチを切ってしまっているのだろう。バターでそうした細さい工くを作る職人は、手を冷水につけて冷やしながら、作業を進めていくというのに。

その部屋には、釈迦如来の座像と地蔵菩薩の立像りゅうぞうが祀られている。菩提樹による木像である。周囲の壁には棚が据えつけられ、チベット仏教の経典がずっしりと保管されている。

あとは「班禅パンチェン行あん宮ぐう」が残っていた。チベットでダライラマと並んで、祭政一致の政権を支えてきたのが、パンチェンラマである。ダライラマとパンチェンラマは、互いに権力を争いながら、また支え合いながら、チベットに君臨してきたのである。

山の上に登っていく。そこは歴代のパンチェンラマやダライラマ、チベット政権の高官が宿泊していた所である。くねくねした急きゅう勾こう配ばいの石段に、ガイドの白さんの方がつらそうである。

それにしても、チベット自治区を旅した前回とは違って、今回は高山病の症状が出ていない。ラサは富士山の標高に近いし、ヤムドゥク湖に至っては四五〇〇メートル、酸素が少なくて意識が朦もう朧ろうとするほどだった。症状が出始めるのは、三五〇〇メートル前後あたりからだとされる。

行宮は中国風の建物で、今は僧侶が読ど経きょうする場所となっていた。僕は境内の商店で、タール（塔爾）寺の歴史の本と『西蔵生死之書』を買った。後者に関しては、チベット仏教の高僧ソギャル・リンポチェが、"The Tibetan Book of Living and Dying"のタイトルで英語で書いた本の中国語訳であることが分かった。日本語訳は『チベットの生と死の書』という題名である。

タール寺はとにかく、ツォンカパのための寺院と言ってよいのだ

が、ツォンカパ自身はラサに出て行くと、もうツォンカ（湟中）には戻ってこなかった。ダライラマ政権を支えるゲルク派の宗祖であり、死後はラサの東にあるガンデン寺（甘丹寺）に埋葬され、霊れい塔とうの中で崇拝の対象となってきたが、文化大革命で遺体が散逸し、わずかに残った骨の一部が再建された霊塔の中に祀られている。

西寧に戻ってきた。青海湖まで往復し、湟中に寄ってきたわけだが、車で五百キロ走行したことになる。約束した通り、白さんのお宅に再びうかがった。水餃子に牛肉の煮物、メロンなどをいただいた。水餃子は黒酢に辣ラー油ユと刻みニンニクを入れただけで、醤油は入っていないのに、何ともコクのある味がする。

白さんのお父さんは、日本にいたこともあり、日本の事情にもよく通じていた。とにかく、まだ二度目に過ぎない僕に、親友であるかのように接して下さった。これが中国式の接待なんだなと感じた。日本人はすぐに相手へ心を許さず、かなり親しくなっても、相手を自宅に呼ぶなんてこともしないのだから。

本当はゆっくりしたかったのだが、ホテルの門限もあるので、一時間半ほどでおいとました。帰り際に青海省の観光ガイドの本などをいただいた。

そして、一昨日と同じホテルに戻ったわけである。旅行中の出来事を日記に書いていたら、午前一時半になってしまった。その時、案の定、ベット横の受話器が鳴った。中国語で女がしゃべっている。その夜、どうやって悪夢の再来を撃退したかは、ご想像に任せることにしたい。

タンカの里レコン

いよいよ旅も後半である。西寧のホテルを出ると、空は青く澄み渡り、快い風が頬を撫なでる。秋風吹くって感じだな。車で三十キロほど走って、平安県にさしかかった。ダライラマ十四世の生家がある町である。この辺りのチベット人はかつて遊牧を行っていたが、今では農耕に携たずさわるようになっている。

ダライラマ十四世はタクツェル村の農家の出身で、今でもその家には十四世の親族が住んでいるという。チベット人がアムドと呼ぶ地域は、青海省の大半と、四川省と甘粛省の一部に相当する。古くはモンゴル王の支配下にあり、中華民国の時代からダライラマ政権の支配が及ばなかった地域である。しかし、ゲルク派の宗祖ツォンカパが生まれたのもアムドであり、チベット文化を考える上では切り離すことができない。

ただ、ここにはイスラム教徒の回族も多く暮らしている。白い帽子をかぶっているのですぐ分かる。清真寺と呼ばれるモスクが街道沿いに見えてきた。これらは文化大革命以後に建てられたものである。宗教が目の敵かたきにされた時代、イスラム教も弾圧を受けていたのである。

車は青チン沙サ山シャンを登っていく。標高は富士山の山頂並みとなる。一休みしようと車を止めて降りた。軽く酔っているようで、現実感が薄れて夢を見ているようだ。

「気持ちいいねえ。酒飲んでるみたいだ」

三人は酔っ払いみたいに、足元がふらついていた。げらげら笑いながら、澄んだ空気を吸うのを楽しんだ。

この感覚には覚えがある。富士山の九合目を歩き、雲海を眺めながら、真夏の光を浴びつつ、真冬の寒さに震えた時。そして、チベット本土に初めて足を踏み入れた日、寒さは感じなかったけれども、高原に放牧された羊を眺めながら、奇妙で愉快な感覚に襲われていた。

これは高山病の始まりの症状なのだ。それを防ぐには、まず水をたくさん飲むこと。そして小便を出すこと。今回はすぐに峠を下りていくから、心配する必要はないのだが。

世界四大文明の一つは、中国の黄河のほとりで生まれた。もうすぐ黄河が見えてくると、白さんが教えてくれたので、心を躍らせていたのだが、道路の下に見えたのは、川幅が十メートル余りで、日本でもよく見かける上流の風景だった。ただし、渓谷の谷底を流れている。

水の色は思ったほど濁っていない。下流に行けば、文字通りの黄色い河になるとのこと。周囲の山を見渡すと、木の生えぬ丸裸の斜面が広がっている。河原には木も生えていて、根元を流れが洗っているのだが、増水すると梢こずえまで濁流が呑み込むと言うから、やはり恐ろしい河川に違いない。

さて、今はどこに向かっているかと言えば、ゲルク派の大寺院ロンウー寺（隆務寺）や、タンカというチベットの仏画で有名なレコンという町である。ところで、中国の地図を開いてみても、レコンという町はどこにもない。というのも、中国では同仁トンレンと呼ばれているからである。

チベット自治区や青海省の大半は、主な先住民族がチベット人で、現在は中国に併合されている。地名の多くはチベット語に由来するが、すべてが発音通りというわけではない。「ラサ」（拉薩）などはそのままだが、「シガツェ」（日リ喀カ則ツォ）や「ギャンツェ」（江孜チャンツー）などはかなりなまった音が中国語の地名となっている。湟中や同仁は、チベット語では「ツォンカ」や「レコン」だが、これは全く別の地名となってしまった。

これは北海道の地名の場合と同じである。先住民族のアイヌ語を、日本語の発音に移すのは難しいから、「トー・ヤ」（洞とう爺や）や「リ・シリ」（利り尻しり）とか、ほぼ発音通りの地名はまれで、「シレトク」（知しれ床とこ）、「モ・ルエラン」（室むろ蘭らん）などはなまっているし、（千ち歳とせ）などは「シ・コッ」が（志し古こ津つ）という漢字を当てられたものの、「死

骨」を連想するとして、おめでたい地名に変えられてしまった。ちなみに湖の方は「支笏湖」として、アイヌ語の発音を残している。

さて、レコンが近づいてくると、チベット人の姿をまた多く見かけるようになった。ちょうど麦の収穫をしているところだった。刈り取ったばかりの麦穂を、積めるだけトラクターに積んで運んでいる。それをわざと路面にぶちまけている。
おばさんたちが道路に繰り出し、早くしないと車が来ちゃうよとでも言いながら、手て際ぎわよく平らに並べているのである。
「あれ、何やってるの？」
「脱だっ穀こくするためですよ、車に轢ひかせて」
白さんの説明に、僕は首をかしげたくなったが、そうとしか説明できない。自分の乗っている車も、麦の上を踏みつけていった。スピードを出しているから、大した衝撃はなかったが。
「車のタイヤに、引っかかってる時もあるんですよ」
「オートバイだったら、危ないよね。転倒する恐れだってある」と僕は答えた。
でも、よくあることだから、白さんも運転手の陳さんも、驚いている様子はなかった。車に轢かせて脱穀すれば、燃料代もかからないからだが、タイヤに潰された穀物なんか食べる気するのか？　でも、粉にしてしまうなら関係ないか。

レコンはお寺の数が多い。ここでは農業や商業も盛んで、人々が豊かに暮らしているからだろうか。チベット自治区では、徹底的に寺院が破壊されていて、大寺院は修復されても、小寺院は瓦が礫れきのまま打ち捨てられていたが。共産党によるチベット侵攻以前から、中国の支配下にあったので、内戦状態に陥おちいることもなかったからか。
レコンのホテルにチェックインし、少し休んで昼食をした。徒歩で十分ぐらいのところに、ロンウー寺（隆務寺）があった。青海省ではタール寺（塔爾寺）に次ぐ規模を誇るチベット仏教の大寺院である。寺院の大部分はダライラマの属するゲルク派で、顕教けん

ぎょうを必修として戒律を重視する。ロンウー寺も例外ではない。『チベットの死者の書』で有名なニンマ派や、ミラレパの出た密教中心のカギュ派は、チベットでは少数派なのである。

ロンウー寺の門前には、チベット人の商店が軒を連ねている。雑貨店、本屋、オートバイ屋、どの店もチベット人が経営していて、チベット語の歌が流れてくる。聞こえてくるのもチベット語。ただし、青海省のチベット語はアムド方言と呼ばれ、ラサ方言との大きな違いは、中国語のような声せい調ちょうがないという点である。

車とトラクターとオートバイが、ひっきりなしに行き交う。けたたましいクラクション。車が通るたびに、目の前が黄色くなるほど埃が立つ。その前を羊を数十頭連れた遊牧民が通り過ぎる。百年ぐらいの時間の差が、この同じ通りに共存しているのだ。

オートバイに乗った若者の顔は明るい。店の前では、商人同士が語り合っている。その前を臙えん脂じの袈け裟さを着たお坊さんが通りかかる。ここは全くチベット人によるチベット人のための町だ。中国語がチベット語の看板の下に書かれ、中国語も通じるという点を除けば。

警察官に両脇を抱えられた犯人が、連行されていくさまも見たが、いずれもチベット人である。チベットの中心ラサではなく、周辺部の青海省の町で、チベット人の活気が見られるというのは奇妙だった。観光地となったラサでは、中国の植民地のような印象を受けたが、レコンは外国人が余り訪れないおかげで、漢族の資本が入り込んでいないものと見える。文字通りの自治が行われているという印象を得た。

雷が鳴ったかと思うと、叩きつける雨が降り出した。白さんと陳さん、僕の三人は、マニ車のあるお堂で雨宿りした。小降りになったところで、ロンウー寺に参拝に出かけた。通りからは人影が絶え、埃もすっかり静まっていた。かわりに、地面はぬかるみと化していた。

大経堂も扉とびらを閉ざし、境内は僧侶の姿もまばら。時折、小雨を避けるように、小走りで通り過ぎるだけ。白さんが中国語で、

チベット人のお坊さんに、僕が日本から来たことを告げた。顔が合ったので「タシデレ」と声をかけると、「タシデレ」と答えてくれた。梵ぼん語ごの「ナマステ」と同じで、いつでも使える便利な挨拶である。

実はロンウー寺の境内は、外国人には未開放の区域だったのだ。なるほど、純粋に信仰のための寺院なので、入場料を取られることもないし、英語はおろか中国語の看板すらない。ただし、許可さえ取れば、未開放の場所でも訪れることができるのが、中国の鷹おう揚ようなところである。チベット人はこの町では、それなりに生活に満足しているのだろう。漢族に搾さく取しゅされているという意識を、ラサの住民のように抱くことなしに。

雨に祟たたられたせいで、ロンウー寺の中はろくに見られなかった。時計を見ると、午後五時少し前になっていた。午後六時まで休憩することになり、ホテルの部屋で一人、中国語の練習をしていたら、いきなり停電してしまった。

そこで、ホテルの受付に行って、明かりがつかないことを伝えた。ところが、いつまで経たっても誰も来ない。もう午後七時で薄暗くなってきているのに、白さんたちまで来ないのだ。

恐らく仮眠していて、寝過ごしてしまっているんだろうが、起こしに行こうにも部屋の番号も分からない。そこで、廊下に出ると「小姐シャオジエ」と声をかけ、職員がまだ来ない。私の部屋は電気がつかない。いつ職員が来るのかと、下手な中国語で尋ねた。小姐は中国語で何か答えたが、何を言ってるのか聞き取れない。ジェスチャーで窓の外を指したので、この辺一帯が停電であることが分かった。

「我写漢字ウォーシェハンツー、我ウォー是シー外国人ワイグウォレン（私は漢字を書きます、私は外国人です）」と紙に書き、下手な中国語で筆談を交えながら、六時に来るはずだったガイドの白さんが来ない、白さんの部屋はどこかと尋ねていると、ちょうど白さんと陳さんが、頭を掻かきながら歩いてきた。思った通り、寝過ごしてしまったということだ。

「我們是朋友ウォーメンシポンヨウ（私たちは友達です）」なんて言ってしまったからかとも思ったが、こんなことで怒ってしまったら、旅も台無しである。ここは中国なんだから、大らかにいこうと心に決めた。夕食を食べにいくことになった。

食堂に入って「何が食べたいですか」と白さんに訊かれたので「月餅ユイピン」と中国語で答えたら、小姐が笑い出した。

「それは秋に食べるものですよ。満月の夜に」と白さんは答えた。

なるほど、だから「月餅」か。中秋の名月に日本人が月見団子を供えるのも、「月餅」を供える中国の習慣が伝わったというわけだ。

「僕は大好きだから、毎週食べてますよ」

「それは経済水準の違いですね」と白さんは続けた。

菜単ツァイタン（メニュー）を見ていたら、「日本豆腐リーベンドーフ」というのがあるので、試しに注文してみた。これは茶碗蒸しをイメージしているのかもしれないが、卵豆腐を椎茸や野菜のあんかけでからめたもので、いくら食べても「中国チュングォ豆腐ドーフ」の味しかしない。

僕は昔の日本の経済水準について話した。子供の頃というのは、昭和四十年代のことだが、バスの小人料金が十五円、給食が一食五十円、出前のラーメンは百二十円。小学生の一ヶ月の小遣いが五百円だったことなども。要するに、今の中国と比べても、ずっと貧しかったというわけだ。

三人は酔っ払っていて、意気が高揚していた。ホテルの庭に柳があったのを思い出して、日本の幽霊の話をした。

「でも、出てくるのはきれいな女だけだよ。そうじゃないと、男に相手にされないからね。騙だまされて殺されたから、恨めしやって出てくるんだよ」

翌日七時半にホテルを出た。朝食は清真食堂だった。イスラム教徒の回族のおばさんの店だが、作っているのは中国式のお粥に揚げパンだ。

店の前に大鍋を据えて、細長いのと丸い煎餅型のを揚げている。

細長い方は油条ヨウティヤオの名で日本でも知られている。お婆さんが揚げたのを、おばさんが手際よくテーブルに運んでいく。僕はお粥はやめて、豆乳の方を選んだ。薄甘くて温かくてほっとさせられる味だ。それに丸い揚げパンと搾菜ザーサイ。久し振りにあっさりとした朝食だ。

回族はやはりウイグル族に近い顔つきをしている。トルコ系の民族なんだろうが、漢族との混血も進んでいるらしい。鼻がそれほど高いわけではないが、目許の感じがいかにも中央アジアの民族の顔なのだ。男は頭の天辺に、白くて上の平らな帽子を載せ、女はスカーフを巻いて髪の毛を隠している。中東の女性とは違って、赤や黄色など、自分の好みのスカーフをしている。

レコンと言えば、チベット仏教の仏画、タンカの里である。タンカは学校の授業でも取り入れられている。その制作を行う工房が、ウトゥン寺（吾屯寺）の中にある。

いかにも田舎の密教寺院といった感じで、観光客などあまり受け容れていない雰囲気だった。こぢんまりとして、僧侶だけの共同体を営んでいる感じである。外国人がたまに訪れて、タンカを求めていくぐらいなのだろう。入場料を取ったり、英語の看板が立てられたりといったこともない。

山門の前に臙脂の袈裟を着た若いお坊さんが、数人立っていた。白さんが中国語で挨拶すると、奥のお堂の扉を開けてくれた。そこには巨大な未来仏、弥勒菩薩が祀られていた。千年ほど前に建てられたといい、堂内はほとんど明かりがないから、極ごく彩さい色しきで細密に描かれたタンカは、目をこらしてもぼんやりとしか見えない。高さ三メートル、幅二メートルはあったろうか。

工房の中に入れてもらった。まず目を引いた絵を紹介しよう。大きく描かれた釈迦如来や普ふ賢げん菩ぼ薩さつの周りの山々は、動物たちや草花の一本一本までが、精魂込めて書き分けられている。顔がん料りょうの石を砕いて描かれているので、千年経っても変色しないのだという。金きん粉ぷんも惜しむことなく用いられ、線の

一本一本もゆるぎない。このぐらいの絵になると、制作には半年かかり、百万元はするという。

そのほかに、ツォンカパや釈迦如来の小さな絵もあったのだが、白ターラ（白度母）の美しさに惹ひかれた。チベットで行われているタントラ仏教では、仏も女神と交こう合ごうした歓かん喜ぎ仏ぶつの姿で描かれる。白ターラは観かん音のん菩薩の妃きさきなのだが、この絵では単身で描かれている。

蓮の台うてなに座した白ターラは、首を心持ち左に傾けている。頭には宝ほう冠かんをかぶり、長い首飾りを下げ、左手を掲げて右手を膝の上に置き印を結んでいる。透き通るほど白い肌に、雑念を排した謎めいた笑みを浮かべている。絵の裏側には、チベット文字が記される。これはタンカに入にゅう魂こんしたという証あかしである。

「タンカを描いているところをお見せしましょう」と、中国語でお坊さんが言ってくれた。工房の奥には、縦二メートル、横一メートルほどの書きかけのタンカがあった。鉛筆で下書きがしてあり、そこに淡い色でわずかに彩色が施ほどこしてある。

「この絵は昨日描き始めて、一ヶ月ぐらいで完成します」

お坊さんの言葉を白さんが通訳してくれた。白さんと陳さんが盛んに中国語でおしゃべりしていたが、会話に入れなくて残念だった。せめてもう少し中国語が上手になれば、お坊さんとも直接話せるのにと思った。

さらに奥には巨大なお堂があって、仏教世界の王が金像の姿で祀られていた。天井すれすれの巨体は、一見すると釈迦如来に似ていたが、背後から数匹の蛇が鎌をもたげている。周囲の壁は、びっしり極彩色のタンカで埋め尽くされている。描き終えるには、十年の歳月を要したのだそうだ。

明かりに照らされたもとで、タンカを芸術として鑑賞するのもいいが、薄暗いお堂の中から、白や極彩色の如来や菩薩、忿ふん怒ぬの護ご法ほう尊そんが浮かび上がってくる方が、凄すごみがあっていい。あたかも心の奥底に眠っていた神仏が、徐々に眼前に姿を現すといった、宗教的な体験に思いを馳はせることができるからだ。

　これと似たようなことは、歌舞伎の世界の隈くま取どりについても言えるだろう。紅と墨で血管が浮き上がるように描かれた線は、電灯の明かりのもとでは、パンクの若者の風俗を連想させるが、江戸時代に蠟ろう燭そくの明かりの中から浮かび上がった白い肌と隈取のコントラスト、派手な衣装が薄暗がりから見え隠れするさまは、幻想的な神秘劇を見ている印象を与えたことだろう。市川団十郎が成田山の不ふ動どう明みょう王おうの霊れい験げん譚たんを演じたことで、「成田屋！」という掛け声とともに、賽さい銭せんが投げ込まれたりするような熱狂を生み出したのも、薄暗い舞台だったからこそと言えるだろう。

　僕は貴重な体験をしたような気がした。お坊さんの機嫌を損じることがないように、堂内はもちろん、お堂の外側すら写真に撮ることは控えた。純粋な信仰とタンカを愛めでる心のみを、この寺は受け容れていると思えたから。

　山門の所まで、お坊さんたちは見送ってくれた。ほとんどが小坊主や青年僧だったが、二人ほど年配の僧侶も混じっていた。チベット語で「テゥジェチェ（有り難う）」と言い、
「さようなら」は分からないので、握手をした後、中国語で「再見サイチェン」と言って別れた。

はるか彼方の極楽浄土

レコンを立つとき、白さんは心もとない表情で、「この先、予定通りたどり着けるか分かりません」と言った。実は、昨夜数時間雨が降ったのだが、そのせいで道路が崖崩れを起こしているかもしれないというのだ。
「中国の山は木が少ないですからね。もし予定の道が通れないとなると、四時間は余計に時間がかかってしまいます」
車で走行しながら、運転手の陳さんは、通りかかった人を見つけるたびに、道路の状況を尋ねていた。たどり着けたとしても、夜になってしまうかもしれない。人によって言うことがまちまちなので、道が通行止になっているのを覚悟で、予定通りのコースをたどることになった。
「運を天に任せるって、日本語がありますよ」
と、僕が言うと、気が楽になったのか白さんが笑った。

今回の道はとにかく悪路だった。舗装されていないばかりか、急斜面の一部を削っただけなので、草も生えぬ剝き出しの崖は、ひと雨降るだけで岩の塊が路面に転がり、路肩の土も洗い流してしまう。通行を確保するためには、雨天のたびに補修工事をしなければならない。その仕事をになっているのが、チベット人やイスラム教徒の回族なのである。
青海省にはお寺が多いと以前書いたが、こんな山あいにと思われるほど、あちこちから金色の甍いらかが顔を覗かせている。チベット自治区では修復が進んでいるのは大寺院だけだったが、ここでは小さな山寺までもが、文化大革命以前の姿を取り戻しつつある。それだけ農民の信仰心が篤あついのだろうが、寺院を再建させる経済力にも恵まれているのだろう。通り過ぎた中で特に立派だったのは、草原の中で多くの伽藍を持つ瓜什則ガシツェ寺だった。金色の屋根と白い壁が土埃の中から浮かび上がって見える。周囲のはげ山には、ぽつんぽつんとしか木が生えていない。

それからまた悪路の連続で、壊れた道路を補修するため、ブルドーザーで路上に砂をまき、人手で路肩に岩を積んだりといった作業が一段落するまで、通行が遮断されているのである。開通した区間を少しずつ進行するといった感じである。

ひどい悪路を抜けると、見渡す限りなだらかな高原に出た。雨が十分に降るのか、草がよく生い茂っている。白いテントが見え、周囲にはヤクや羊が放牧されている。いくつかの群れがあって、その先はどこまでも草原が続いている。

目を凝らすと、赤紫や黄色の花々が群生している。オホーツク海の原生花園を思い出したが、規模は比べようのないほどで、ここは大陸なんだと実感する。青空はあくまでも澄んで、白い雲はほとんど動きを止めている。建造物といったら、地平線に近い丘陵のあたりに、土塀に守られたチベット人の集落があるばかり。

これほどまでに何もない所は、精神は限りなく自由であっても、都会人には耐えられないほど不自由に違いない。水は近くで手に入らないだろうし、もちろん電気も。ただ、今では家によっては、発電機を備えているようだが。

どこまでも続く高原を過ぎて、ふたたび山の上に登り、緑のパノラマを見渡しながら、持参してきたメロンを割って食べた。味は格別だった。雄大な眺めを見ながらということもあるが、果物が高価であるために、ほとんど口にしておらず、極端なビタミン不足に陥っていたからだ。

午後一時半、夏シャ河八の町に入った。ここはもう青海省ではない。甘粛省の甘南藏（チベット）族自治州である。山と山に挟まれた谷あいに、細い川夏河が流れ、その奥にラプラン寺（拉卜楞寺）の壮大な伽藍がそびえている。

ラプラン寺もゲルク派に属し、チベット六大寺院の一つである。ラプランとは「仏の宮殿のある所」を意味する。創建は清朝の康こう熙き四十八年（一七〇九年）だから、古こ刹さつというほどではないが、壮麗な伽藍と保存されている書物の豊富さは、チベット仏教の寺院の中で随一である。経典のほかに、医薬に関する書籍も多

く、チベット医学院では、伝統的な薬の製造もされている。
　夏河はラプラン寺の門前町で、参詣者のための宿泊施設とお土産みやげ屋ばかりが目につく。イスラム教徒も住んではいるが、ホテルやレストランの多くはチベット人で、チベット語の歌も流れている。ここにはチベット語のテレビ番組もある。
　チベット人の若者が、オートバイに乗って、クラクションを鳴らしながら走り抜ける。ここがレコン（同仁）と違うのは、欧米人の姿が目につくことだ。ただし、レコンからの悪路は避けて、もっぱら蘭州から訪れるらしい。
　町がけたたましい音にあふれ、埃っぽいのは確かだが、谷あいの奥にあるラプラン寺まで来ると様相は一変する。入口には広い駐車場があり、背後に崖が控えているところなどは、ラサのセラ寺を連想させる。ここはチベット自治区の大寺院のように、観光客を多く受け容れているのだ。レコンのウトゥン寺で感じた空気とは異なり、からっと晴れ上がった陽気さに満ちている。

　観光客は寺のガイドに従って、拝観することになっている。白さんの話によると、外国人と中国人とでは料金が全く違うというのだ。そこで、中国人の観光客として振る舞ってほしいと言われた。
　小声でも「はい」「です」「ます」と言えば、たちまち日本人であることがばれてしまう。そこで、白さんにメモを書いてもらい、分かったら「対トェ」と答えることにした。日本語の仏教用語は中国語と同じだから、簡体字を知っていれば、仏像の説明などの看板も、読むだけで大体分かってしまう。
　医学院には銅製の釈迦牟尼像がある。これは一八〇九年に造られた。文殊菩薩像は高さ二七メートルで、一九二八年に造られた。ラプラン寺は大寺院ではあるが、古寺というほどではないし、大火も経験しているから、古めかしいという感じはない。
　喜金剛学院の本尊は中国語で喜金剛、チベット仏教のヘーヴァジュラである。母もタントラ系の仏で、ヒンドゥー教のシヴァ神に似て、青い体に多数の腕を持ち、女神を抱きながら踊っている。父タントラの『秘ひ密みつ集しゅう会えタントラ』では、仏陀がセッ

クス・ヨーガを行う観想をするのに対して、母タントラの『ヘーヴァジュラ・タントラ』では、墓場でのヨーガや、飲酒、肉にく食、少女とのセックス、精液を飲むなど、この世のあらゆる道徳が破壊される。もちろん、これらのおぞましい行為は、現在では象徴的な儀礼と瞑想に取って代わられている。何のためにと言えば、善悪の彼岸に空の境地を求めるためである。

日本人には馴な染じみが薄い世界だが、真言密教の『理り趣しゅ経きょう』でも、愛欲は肯定されている。イメージとしては、躍動的な点で明王に近い。父タントラの『秘密集会タントラ』に登場するヤマーンタカとは、大だい威い徳とく明みょう王おうのことである。交合した歓喜仏としては、聖しょう天てんぐらいしか知られていないが。南北朝時代に流行した真しん言ごん立たち川かわ流りゅうでは、男女の交合によって悟りを求め、髑どく髏ろに精液を塗るなどの黒魔術的要素があったが、異端として禁止されている。

ラプラン寺のヘーヴァジュラ（喜金剛）は金像。一九五六年にバター（酥油そゆ）の灯明が原因で失火し、喜金剛院は焼失した。翌年、再建されたわけだが、喜金剛像はこのとき、パンチェンラマ（班禅大師）によって贈られた。声しょう明みょう、詩しい歌か、梵語、チベット語の書法、音楽、舞踊、絵画、暦学などが、ここでは学ばれている。

弥勒仏殿は一七八八年に建設が始まり、一七九一年に竣しゅん工こうした。チベットと中国の様式の折せっ衷ちゅうで六階建て、最上階は宮殿風となっている。五六億七千万年後に衆生を救う弥勒菩薩は、金像で結けっ跏か趺ふ坐ざの姿で祀られている。ラプラン寺の中でも、主要な仏殿の一つである。日射しで瓦が金色に光るので、中国人は「大金瓦寺」と呼んでいる。

案内書を買っていたら、中国人の集団とはぐれてしまった。そのおかげで、かえって境内を自由に歩けたのは幸運だった。いったん駐車場に出たあと、車に乗って川沿いにある「貢唐宝塔」に向かった。お堂の中を巡ってから、狭い階段を上っていくと、塔の上まで出ることができた。

そこから緑がかった瓦が下に見え、ラプラン寺の壮大な伽藍の全

体が見渡せるのだった。ラサのポタラ宮に次ぐ大きさを誇るだけに、眺めていて見飽きることはない。一望できるから、堂どう宇うと僧そう房ぼうの数に圧倒されてしまうのだろう。
　ラサのセラ寺などは、山の斜面に建てられているので、このように谷間に広がる全体を眺望することができない。「貢唐宝塔」から見下ろすと、右手には大夏河が流れている。まあ、小夏河と言った方がいいほどだが、清流はゆるやかで水面がきらきらしている。
　左右の山にはさまれた谷に、ラプラン寺が建てられたのが分かる。左手の山はチベットにもあるはげ山で、ところどころ草が生えるばかりで、ほとんど灰色がかっている。打って変わって、左手の山には木が生い茂っている。
「どうしてなのかな」と白さんが言った。
「川の下には地下水が流れているんだよ。だから、その近くは乾燥しきらずに、木が生えることができるんだよ」
「知らなかった……」
　ここから川を右手に見ると、谷が伽藍で埋め尽くされているようだ。屋根の高さはまちまちなのだが、アンバランスのまま、バランスが取れていると言おうか。ちょうど日本の違棚ちがいだなのような調和を生み出しているのだ。
　実際には伽藍の向こう側には、夏河の町が広がっているのだが、谷が寺の建物で埋まっているような錯覚を覚えるのだ。確かにこの町は、ラプラン寺のために生まれ、参詣者のために形作られたと言ってもいい。
　その日、夏河では外国人を招いたマラソン大会が開かれていた。塔からはゴールの門や、飲み物を売るパラソルも見えた。なごやかな笑い声まで、聞こえてきそうだった。二九〇〇メートルの高地では、空気が多少は薄くて、平地での競技のための訓練には、持って来いなのかもしれない。

　車でホテルに戻った。夕食でガイドの白さん、運転手の陳さんと白酒パイジュを飲むことにした。これはひな祭りの「しろざけ」ではない。中国の焼酎であって、度数は五〇度以上ある。盃さかずき

に注ついだのを、ちょっと口にしただけで、喉のどが焼けるように熱くなる。
　ジャンケンをして負けた人が飲むことになった。中国人はよくやるらしい。日本人がやるビールの一気飲みより、ずっときつい。だけど、僕はほとんどジャンケンに勝ち続けた。勝つためのコツを知っているから。
　もうすぐ二人ともお別れだ。だから、コツを教えてあげた。そしたら、続けざまに負けてしまい、白酒を飲む羽目になった。そのコツっていうのは、万人には通用しない。特に勘の鈍い相手には。
　白さんがホテルの部屋に遊びに来た。僕は日本語で次々に猥談を言って、笑わせ続けていた。セックスの話から、チベット仏教の歓喜仏の話に移っていた。ガイドなら知っていた方がいいと思ったからだ。
　クンダリーニ・ヨーガと同様に、体内に潜むエネルギーを、上昇させるための修行をするのである。気を頭頂に上げるのに、性器を刺激した方がいいのだが、その反面危険も多いらしい。セックスの快感自体にとらわれてしまいがちで、精液を「菩提心」と考えて洩もらさないというのは、凡人には並大抵のことではないからだ。そして、無理に射精を止める場合の心臓の負担など、相当のものと考えなければいけない。
　それだけ性の快楽と、死の瞬間の感覚は似ているからで、本来戒律で禁じていたはずのセックスという禁じ手を、後期密教が取り入れたのも、効果の大きさによるところが大きいとされる。
　ただし、チベット仏教の主流をなすゲルク派では、出家した僧侶は、女性とセックスしてはならないことになっている。ではどうするか。瞑想で女神をイメージして、交合しているのと同様の体感を得ようとするのだから、これは並大抵の修行ではない。
「お坊さんは死ぬ練習をしているんだよ。頭の上から魂が抜ければ極楽にいけると考えているんだが、それは非常に危険な修行で、心臓が停止して本当に死んでしまうかもしれない」

　白さんは愛嬌があって、好奇心が旺盛だった。数日間の付き合い

だったが、弟みたいな感じがしていた。
「もうすぐお別れだね」と言うと、白さんは黙り込んでしまい、うつむき加減になった。
「会うは別れの始まりって言葉があるよ。さよならだけが人生だって詩もね。中国語では『再見サイチェン』だけど、日本語の『さようなら』の『さよう』とは『そう』っていう意味で、別れるという運命なら、別れましょうっていうことなんだよ。これは仏教の影響かもしれないけどね」
　ちょっと感傷的にさせて、純情な彼の心を弄もてあそんでいる気がしないでもなかったが、話しているうちに、僕自身も寂しい気がしてきた。
「私は本当に日本へ行って、先生の学生になりたい。先生に習いたいことがいっぱいある」と白さんは洩らした。
「どちらでもいいんだ。君が仕事で僕にいろいろしてくれて、それが終わったので『さようなら』なら、それでもいいし。また話したいと思うなら、手紙とかくれればいい。そしたら返事は書くから」
　彼はうなずいた。胸がいっぱいになった様子で、言葉少なげに部屋を出て行った。午前一時近くになっていた。

蘭州にも白頭山？

翌朝はよく晴れていた。八時にホテルを出た。ラプラン寺の「貢唐宝塔」に上り、夏河の町を見渡した。朝日を浴びた伽藍の屋根に、川を渡る冷ややかな空気が流れ、別れの感傷を引き立てていた。昨日のマラソン大会に集まった人々の姿もなく、始まったばかりの町の一日を、ともにしない非情さが胸をよぎった。

チベット人が居住する地区から、いよいよ離れることになる。緑の山の間を、車は時速百キロぐらいで走り抜けていく。しかも、カーブした道なので、道路の中央を走っていくのだ。突然、対向車線から車が現れると、自動車のレーサー顔負けのハンドルさばきでよけていく。ゲームセンターで遊んでいるなら、衝突してもやり直しがきくのだが。そこで、僕は冗談を言った。

「中国はわざわざ高速道路を作る必要がないね。普通の道が高速道路になるんだから。でも、そこをおじさんが歩いていたり、羊の群れが横切ったりするんだよね」

川沿いの道を走っていくと、鉱石を取るために崖を爆破していた。通行止が解除されるまで、道ばたに腰掛けて川を眺めることになった。白さんはうつむき加減になり、ぽつりぽつりとつぶやいた。

「僕は高校の頃、政治の勉強が好きだったんです。でも社会に出てみると、学校で習ったこととは違ってました。悲しくなったんです。でも、学生は勉強しなければいけません」

時折、小石が砂埃を立てながら転げ落ちていくのが見えた。

ふたたび車に乗り込んだ。イスラム教徒が住む臨夏が近づいてきた。清真寺（モスク）の塔が見えている。以前、回族は『コーラン』の音楽を流していたが、今はやめているという。街に住んでいるのは、イスラム教徒ばかりではないのだから。

時間がないということで、臨夏は通過することになった。ひたすら蘭州に向かって走っていた。車の中では口数が少なくなった。お

腹が空いて口をきく元気もなかったから。蘭州に到着したのは午後三時近く。ホテルにチェックインし、「獅子頭」という、ハンバーグ風の肉料理を食べた。

蘭州はとにかく暑い。青海省は涼しくて、晩秋を思わせるほどだったのと対照的だ。遅い昼食を終えて、午後五時近くに、蘭州の南、五泉山公園に向かうことになった。五つの泉と仏教寺院が建ち並ぶ景勝地だそうだ。

中国の寺院はどこかしら、日本の物とは印象が異なる。仙人でも出てきそうな雰囲気なのだが、よく見ると屋根の甍が反そり上がっている。しかも中国人が有り難がる色、朱で柱が塗りたくられている。寺の本堂を覗くと、中には金色の弥勒菩薩が祀られていたが、日本でお目にかかる姿とはかなり違っている。布ほ袋てい様と見紛みまがうほどのふくよかさで、お腹がでっぷり膨らんでいるのだ。中国人の価値観では、太っていることは福徳や富を象徴するのだから、痩せている仏さまでは有難みが薄いらしい。
「中国はおいしい物が多いから、未来仏も太ってしまったんだね」と、僕は軽口を叩いた。

奇岩を売っている店があった。切断された面には、和服姿の女や菊の花びらを思わせる模様が見える。
「这チェ个ガ好ハオ像シャン是シー您ニン的ダ脸リェン（これはあなたの顔のようですね）」

女の顔に見える石を指さして、売店のおばさんに言ったら、まあ恥ずかしいと言わんばかりの顔で笑っていた。

山の中腹には第二の泉があった。そこには中秋の名月の夜、天井に開けられた穴から光が注ぎ込み、水面にくっきり月影を映し出すということだった。

夕食になった。今夜も白さん、陳さんとジャンケンをやって、負けた人間が白酒パイジュを飲んでいた。全く男って、いつまで経っても子供なんだからと言う声が、どこかから聞こえてきそうだった。そのうち、話はチベット仏教に移っていた。陳さんが「破瓦ポ

ワ」と言っているので、死の瞬間に頭頂から魂を抜く「転てん識じき」のことを言っているんだなと思った。「ポワ」と聞くと、オウム真理教が「殺害」の意味で使っていたのを思い出すが、それは誤用であって、死の瞬間に成仏する修行を指すのである。頭頂を開くので「開頂」と表現されることもある。

僕は蔵密気功（チベット密教の気功）をしばらくやっていたので、頭頂が盛り上がってきていた。ヨーガなどで体内に眠るエネルギー、クンダリーニが上昇すると頭頂部に仏像のような瘤こぶが出来るのである。そこで白さんに通訳してもらい、陳さんに僕の頭頂を見てもらうことにした。

「うん、まだだね。頭頂が開くと、こんなふうに丸い穴が出来るんだよ」と、指で円を作りながら説明してくれた。

「ポワは若いうちにやると良くないって聞いたよ。そこから気が抜けていってしまうから、若死にしてしまうんだって」と僕は言った。

「不是プシ」と陳さんは否定した。「それは違う。阿弥陀仏に何万回もお祈りすれば、寿命を延ばしてもらえるんだよ」

それを聞いて、陳さんが言っている「ポワ」は、阿弥陀仏の浄土への往生を目指す古派ニンマ派の修行だろうと思った。

「私はいろいろな宗派の本を読んでいる。その中で一番適当だと思う方法を実践しようと考えている。その中で阿弥陀仏にお祈りして行うポワが一番簡単だと思った。ただ、阿弥陀仏の名前を唱えればいいんだよ」と陳さんは続けた。

「頭頂に穴が開いても、若死にしない方法が二つある。一つは開く寸前の状態にして、死ぬ時に開頂する方法。もう一つは開けてしまってから、いつも阿弥陀仏にお祈りして、その力をいただく方法。一度開いても、修行をやめてしまえば、自然に閉じてしまうものだよ。頭頂が開けば、自由に体の外に出たり、また戻ったりできるようになる。そして、生命が肉体の死後も続くことが分かるようになる」

「でも、死後に人間になるとは限らないでしょう？」と僕が言うと、陳さんは首を振った。

「一度、頭頂から出て行った者は、もう人間にしか生まれ変わらないんだよ」
　僕は中国人の青年が、これほどチベット仏教に入れ込んでいるのに驚いた。「漢族は文化的に進んでいるが、チベット人は仏教を盲信している。私たちは遅れている民族を導いてあげなければならない」と、以前、中国人の女子留学生が言っていた。それが一般的な漢族の考え方だと思っていたから、余計に衝撃的だった。とはいっても、中国人の多くが無宗教になったのは、共産党政権が支配するようになってからであり、今でも観音菩薩や阿弥陀仏を信仰している人が少なくない。チベット仏教に触れたのも、モンゴル人に支配された元朝の頃からだから、西洋人なんかよりよっぽど、中国人の方がチベット仏教との付き合いは長いのである。

　店を出たのは午後十一時半頃だった。僕は白さんに「你ニー今ジン年ニェン多ドゥオ大ダー年ニェン紀ジー」（今年何歳ですか）と聞くと「我ウォー今ジン年ニェン二アール十シー五ウー岁スェ」という答えが返ってきた。陳さんは二十九歳だそうだ。ちなみに、僕もまだ三十代半ばだった。「我ウォー們メン是シー朋ポン友ヨウ」と言っていたのが、いつしか「我ウォー們メン是シー兄ション弟ディ」に変わっていた。
　酔った僕らは子供に返っていた。白さんは僕と陳さんの間で、二人の腕にぶら下がっていた。
「僕は弟だから、わがままいっぱい言いたいんだ」と叫んでいた。
　ホテルに戻ると、白さんが部屋にやって来た。
「もうすぐお別れだね。いろいろ教えてくれて有り難う」と言うと、白さんは「僕は何もできなかった」と答え、夕べのように「日本へ行って、先生の学生になりたい」と顔を上げた。
「今まで教えた学生で、今でも覚えているのは一割もいるだろうか。日本語を教え始めた頃の学生のことは、よく覚えているけどね。でも、忘れられない人のことは、いつまでも心に残っているよ。君はいい思い出を僕にくれたね」
　僕がそう言うと、白さんはしんみりとした表情になって、僕の方

をまともに見られなくなった。

翌朝、ホテルを出て空港に向かうまでの間、白頭山で遊ぶことになった。白頭山だって？　それって中朝国境にある長白山のことって聞かれそうだが、巨大噴火で渤ぼっ海かいという国を滅ぼした火山とは関係ない。黄河の畔ほとりにある白頭山は、頂上に十七メートルの白塔が建ち、蘭州を一望できる高台である。

薄い肌色の塔は西安の大雁塔ほど高くないが、インドで舎しゃ利りを納めたストゥーパ（仏塔）が、日本の五重塔に変化する過程を示しているのか？　石造りで入れ子細工のように、上の階に行くほど小さくなっている。実は、チンギスハンに謁えっ見けんしようとして、この地で没したチベット僧を供く養ようするために建てられたのだそうだ。

時間がなかったので、そこにたどり着くために、けもの道のような崖をよじ登った。そこで三人、別れの記念撮影をした。眼下にはおだやかな流れとなった黄河が、蘭州の町を貫いている。青海省の山中を流れる急流と比べると、非行で暴れ回った少年が、誠実な青年に成長したかのようである。

時計を見ると、十時二十分。下りて蘭州の空港に向かうことになった。

「もうすぐみんなとお別れだけど、僕自身も旅行している自分とお別れして、また普段の自分に戻っていくんだ」

それからは、白さんに「袖そで振り合うも他た生しょうの縁」ということわざについて話し、「こうして会っているのも、前世で会っていたからかもしれないし、たとえ生きているうちに会えなくても、生まれ変わったときに会えるかもしれない」と言うと、白さんもうなずいた。

蘭州空港の前に着いたのは十一時半頃。蘭州名物の牛肉麺を食べた。小麦のこしのある麺を、職人は引き延ばしながら製麺する。もとは豚肉を食べない回族の料理で、香辛料の効いた真っ赤なスープに入っており、牛肉の旨みが凝縮しているから、辛い料理が好きな

らぜひ食べてみるといい。
　牛肉麺といっても、薄味で花椒だけが効いていたり、生姜の千切りが盛り付けられたりといろいろだが、日本で食べられているものは台湾風で、蘭州の人が東京に行って技術を広めているという。
「一点半イーディエンバン（一時半）」という中国語が聞こえてきたから、僕はすかさず「両点二十分リャンディエンアールシフン（二時二十分）」と答えた。ガイドの白さんも、運転手の陳さんも、僕の出発時間を間違えていたようだ。時間の余裕があるので、僕と白さんは牛肉麺を食べた店に戻り、ビールを飲んで語らうことにした。

　乾杯した。中国式に一気に飲み干す。白さんに注いでもらった。飲むうちに、ちょっと感傷的な気分になった。どんなに親しくしても、別れの時というものが、刻々と迫っていたのだから。自分を納得させたかったのだろう。抹まっ香こうくさい話を始めていた。
「仏教ではすべては心が生み出したものだって考えるんだよ。この花だって、コップのビールだってね。君は実在する僕を見ていると思っているけど、それは君が心の中で見た僕のイメージに過ぎないんだ。だから、僕と別れたと思っても、心の中に僕が現れれば、別れたことにはならないんだよ」
「先生に手紙書きます。今話すみたいな日本語だけど」
　陳さんは車で待っていた。僕と白さんが乗り込み、飛行場に入った。そこで三人で記念撮影。陳さんと握手して別れた。白さんは僕の搭乗手続きをしてくれた。
　僕が礼を言うと、「本当に短かった。さびしい」と白さんが言った。僕が肩を抱いてやると、有難うと答えた。彼は手を振ると、振り返ることなく出て行った。僕はそのまま搭乗口へと急いだ。
　雨が降り出していた。飛行機のタラップを上るときには、本降りになっていた。あわてて駆け上って機内に入った。午後二時二十分、蘭州の空港を離陸した。窓を叩く滴しずくを見て「これは別れを悲しむ涙だな」と思った。白さんは今頃、車の中で陳さんと何を話しているんだろうと思った。きっと雨についてしゃべっているに

違いない。

　北京空港に着くと、行きと同じホテルに泊まった。振り出しに戻ってしまった感じがした。しかし、この旅で出会ったことを記憶にとどめるために、日付が変わるまで日記を書き続けた。僕の心の中には、まだ白さんも陳さんもいた。

　翌朝の飛行機で帰国した。九日間も中国にいたので、感性が半ば中国人のようになり、日本人のきめ細かい神経が、かえって煩わずらわしく感じられるようになっていた。

　その後、白さんとは何回か手紙のやりとりをした。また旅行に来るように誘われもしたが、やがて音信も途絶えた。それから十数年の月日が経った。

チベット人との語らい

以前、中国青海省出身の日本語研究者に、チベット料理店へ誘われたことがある。チベットというと、チベット（西蔵）自治区だけかと思われがちだが、本来のチベットは自治区以外に、青海省の大部分と四川省の西半分、甘粛省や雲南省の一部を含めた広大な領域である。

彼の故郷は同仁、チベット語ではレコンと呼ばれる町である。ロンウー（隆務）寺のある町には、以前僕も訪れたことがあるので、自ずから親しみが湧いたのである。

チベット料理店というのは、実は東京西麻布にあるMETOKという店である。彼の勧めで出された料理は、羊の揚げ物、蜂の巣の辛子炒め、モモ（チベット餃子）、肉うどん、大根の漬け物、スープ、ゼリーなどである。飲み物はワインの後、紹興酒をもっぱら飲んだ。チャンという大麦の酒は、糠ぬか漬けの匂いがするすっぱいどぶろくといった感じで、日本人の口には合わないだろう。現地の人はチャンを水代わりに飲んだりするが、最近はチベットの若者でも、麦焼酎の方が人気があるらしい。

彼からチベット人の風俗についていろいろ聞けた。大柄で体格のいい彼は、現地の競馬大会にも出場したことがある。チベット人と一口に言っても、牧畜をしている人や農耕をしている人がいる。遊牧している人々の場合、女性でも煙草たばこを吸う。夏の間は隣家とは一日がかりの距離だが、冬は高地から下りてくるので、十軒ぐらいの集落を形作る。外はとても冷えるが、家の中はヤク（毛牛）や羊の糞を燃やしているので暖かい。

糞を燃料にするといっても、乾燥の激しいチベットでは、たちまちカラカラに乾いてしまうので、肥料の鶏けい糞ふんほども臭わないらしい。そもそも、山の多くははげ山なので、かつての日本のように、薪たきぎを拾いに行くわけにもいかないのである。

僕はよくバター茶を飲んだものだが、同じ遊牧民族でも、モンゴ

ル人の物とチベット人の物とでは、味がかなり違う。モンゴルの物はバター茶というよりミルクティーと言った方がいい。プーアール（普洱）茶を用いながらも、岩塩の味を効かしているので、飲み過ぎると喉が渇いてしまう。

一方、チベットのバター茶の方は、バターの味がしっかりして濃厚だが、それほど塩分は感じないのである。ツァンパという裸麦の麦焦がしとともに飲むものである。

自分の嗜し好こうでは、チベットのバターの味が濃いお茶の方がおいしい。ただ、同じチベットのバター茶でも、冬の物には独特の臭いがあるらしい。というのも、寒さのせいでヤクの乳の出が悪いので、一ヶ月前の乳からバターを作ったりすることもあるからだという。

チベット語のラサ方言とアムド（青海省）方言は通じない。三十パーセント分かるかどうかだという。ラサ方言には、中国語のように声調があるが、アムド方言には声調がない。チベット語には、単語レベルで中国語を語源とするものがあるが、文法はむしろ日本語に似ており、主語・目的語・動詞の語順で、助詞なども存在する。

青海省の多くを占めるアムドは、中華民国の時代から中国の支配を受けており、また中国人（漢族）以外にもモンゴル人やイスラム教徒も混在する関係で、チベット人でも中国語ができる人が多い。チベット自治区の村などでは、チベット語しかできない人もいて、就職などができずに困っている。

現在の中国政府は、チベット人やモンゴル人に、小学生の頃から中国語で教育を受けさせようとしている。これは少数民族が多数派の中国人（漢族）の中で生きていくには、やむを得ない選択かもしれない。ただし、中国語で教育を受けたチベット人が、家庭でチベット語を使わなくなれば、チベット語も滅びゆく言語となる恐れがあるという。

あとがき

二〇〇〇年（平成十二）に、二度目のチベット文化圏を旅して以来、中国には行っていない。二〇〇六年には、青海省の西寧とチベット自治区のラサ（拉薩）を結ぶ青蔵鉄道が開通した。僕が青海省を旅した当時は、ゴルムド（格爾木ゴルム）までしか通じていなかった。青蔵公路をバスでチベット入りすることは、外国人には認められていなかった。もしふたたび訪れることがあれば、青蔵鉄道を経由してチベットに入りたいものだ。

今回の青海省の旅では、チベット文化に初めて触れた驚きはなかったが、ガイドと運転手を務めてくれた中国人青年との交流が中心となった。また、チベット仏教の死の修行「転識（ポワ）」についても、情報を交換することができた。これについて日本語で読める文献としては、中沢新一・　ラマケツンサンポ共著『改稿　虹の階梯―チベット密教の瞑想修行』と、高藤聡一郎著『秘伝！　チベット密教奥義』などがある。後者には中国人向けに簡略化された李仲愚医師の開頂法が紹介されている。中国語での原文にリンクを張っておこう。

最後に、今回の旅での行程を記しておこう。

二〇〇〇年八月六日～八月十四日

一日目
　成田発…大連経由…北京泊
二日目
　北京発…西寧観光（北禅寺）…西寧泊
三日目
　西寧発…日月山…青海湖観光（鳥島）…青海湖泊
四日目

青海湖発…小北湖…タール寺…西寧泊

五日目

西寧発…ロンウー寺…同仁（レコン）泊

六日目

同仁発…ウトゥン寺…ラプラン寺…夏河泊

七日目

夏河発…五泉山…蘭州泊

八日目

蘭州発…白頭山…北京泊

九日目

北京発…成田着

二〇一六年十一月二十二日

髙野敦志